The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十一巻第一号　平成二十四年十二月

「真諦系一乗家の著作」としての『一乗仏性究竟論』

小野嶋祥雄

問題の所在

『一乗仏性究竟論』(1)六巻は、唐初期の三一権実論争の中、一乗真実・悉有仏性説を主張する立場から著された著作であるが、本書の教学的位置付けをめぐっては、学者の間に諸説が存在する。

『究竟論』の著者である法宝（六二七―七〇三～七〇六年頃）は、賛寧撰『宋高僧伝』には「三蔵奘師学法之神足」(2)と記されているが、『究竟論』は玄奘とその門下が主張する三乗真実・五性各別説を批判することを目的とした著作であることから、その教学を玄奘門下のものと位置付けることは困難であろう。このため、伝記資料からではなく、『究竟論』自体に説かれる教学等からの位置付けが試みられており、法宝の五時教判が『涅槃経』を最高位に置くことから涅槃宗の論師とする布施浩岳氏の説や(3)、法宝と同時代の円測（六一三―六九六年）の『解深密経疏』巻四に、

一ニハ真諦等ノ一類ノ諸師ハ、依テ二法華等ノ諸経及ヒ論一トニ、皆作ス二此ノ説一ヲ、一切衆生ニ皆有リト二仏性一。〈中略〉二ニハ者大唐三蔵ハ、依テ二諸ノ経論一ニ立テ二五姓一ヲ、無姓有情ト無涅槃性ト定性二乗トハ必ス不ト二成仏セ一。

（『新卍続蔵』巻二一・二六八下―二七〇上）

とあり、当時の三一権実論争の一乗真実・悉有仏性説を主張する側を指して「真諦等一類の諸師」と記すことから、『究竟論』を「真諦系一乗家の著作」とする説が根無一力氏によって提示されている(4)。

この中、法宝と同時代の円測の『解深密経疏』巻四の記述を論拠とする根無氏の指摘は、『究竟論』の教学的位置付けを考える上で重要な示唆を与えるものと思われる。そこで、小稿では如上の指摘を踏まえ、『究竟論』に見られる真諦三蔵訳『仏性論』の真偽をめぐる論争をとりあげ、『究竟論』の教学的位置付けについて考察することにしたい。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

一　玄奘門下の真諦三蔵訳『仏性論』への疑義

『究竟論』に見られる真諦訳『仏性論』の真偽をめぐる問題を検討するに先立ち、玄奘門下では『仏性論』に対して如何なる見解を有していたのか予め考察しておきたい。

玄奘門下の論師には、『仏性論』に対して、翻訳に誤りがありとする見解と、梵本が存在しないとする見解があったようである。先ず、『仏性論』に翻訳の誤りがあるとする見解は、円測の『解深密経疏』巻四において、

「依他起相ノ上、遍計所執相ノ無キヲ執以テ為レ縁ト故ニ、円成実相ヲ而可シ了知ス一。釈シテ曰ハク。〈中略〉有ルカ云ハク「無執トハ者、無キカ能ク執スルコト依他及ヒ所執ノ分別ニ故ニ言フ無執ト。故ニ仏性論ニ云ハク、問テ曰ハク。真実性ハ縁リテ何ノ因ニ得ルヤ成スルコトヲ。答テ曰ハク。由ルカ分別ト依他ト極リテ無キニ所有ニ故ニ得ル顕現スルコトヲ」。解シテ云ハク、訳家ノ謬也。

（『新卍続蔵』巻二一・二五七下）

と示されるものである。円測はこの中で、ある者が『仏性論』を教証にして述べる『解深密経』の解釈に対して、その論拠とする『仏性論』の文は真諦三蔵の翻訳の誤りであることを指摘している。

一方、『仏性論』には梵本が存在しないとする見解は、凝然（一二四〇―一三二一年）の『五教章通路記』巻二十に引用される霊雋の『対法論疏』の佚文に説かれるもので、

霊雋ノ対法論疏ノ第十末ニ云ハク「仏性論ト無相論トハ西方ニ無シトニ別ノ梵本一」〈已上〉

（『大正蔵』巻七二・四五五中）

というものである。(5)

以上の通り、玄奘門下の論師には真諦訳『仏性論』に対して、翻訳に誤りがあるとする見解と、梵本が存在しないとする二つの見解があったことが分かる。こうした見解がどのように導き出されたのかはなお不明な所があるが、(6)このような知識を有していたことは、本稿が検討する『究竟論』に見られる真諦訳『仏性論』の真偽問題の中の、『仏性論』の翻訳に疑義を呈した三乗真実説を主張する立場の考えの前提となるものと思われる。

二　真諦三蔵訳『仏性論』の真偽をめぐる問題

『究竟論』には、巻一「略述綱要章第二」と巻二「列経通義章第五」に、真諦訳『仏性論』の真偽に関する問題が取り上げられている。先ず、巻一「略述綱要章第二」には、

十一ニ、或ルハ信シテ世親菩薩ハ破スト無性之論ヲ一謂ヒ瑜伽ヲ為スト邪執ト一、或ルハ信シテ慈氏菩薩ハ破スト有性之論ヲ一謂フ仏性ハ非スト真ノ訳一。不レ知ラド仏性論ハ破シ有部等ノ無ヲ一、瑜伽論ハ破スヲ分別部ノ有ヲ上。非ス是レ世親菩薩ハ指シテ瑜伽ヲ為シ邪執ト一、慈氏菩薩ハ斥クニ涅槃之仏性ヲ上。

（『龍大論集』八四頁一七―二〇）

とあり、『仏性論』と『瑜伽師地論』の関係を述べる中で、ある者の弥勒菩薩は有性の論を破斥すると信じて、『仏性論』

「真諦系一乗家の著作」としての『一乗仏性究竟論』（小野嶋）

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

は真実の訳ではないとする見解が批判されている。(7)

次に、巻二「列経通義章第五」では、

七ニ宝性論ノ第三ニ云ハク、「是ノ故ニ華厳経性起ノ中ニ言ハク、復タ次ニ、乃至、邪見ノ聚等アリ。衆生ノ身中ニ皆有リテ如来ノ日輪ノ光照一、作シ二彼ノ衆生ノ利益ヲ、作スカ三未来ノ因トシテ善根ノ増二長スルコトヲ諸ノ白法一故ナリト。向ニ説ク、一闡提ハ常ニ不レ入二涅槃一、無涅槃性ノ者ナリト。此ノ義云何ン。為レ欲スルカ三示二現セント謗大乗ノ因一ヲ故ナリ。此レ明スヤ二何レノ義ヲ。為レ欲スルカ三迴二転セント誹謗大乗心ト不求大乗心一ヲ故ナリ。依ルカ二無量時一ニ故ニ、如ク是ノ説クナリ。以テノ三彼レ実ニハ有ルヲ二清浄性一故ニ、不レ得ト四説キテ言フコトヲ三彼レ常ニ畢竟シテ無シト二清浄性一」。准スルニ此レニ、論ノ所ハ明ス与二仏性論ノ意一同シ。此ノ論ハ是レ堅慧菩薩造菩提流支訳ナリ。仏性論ハ世親菩薩造真諦三蔵訳ニシテ与二宝性論ノ意一同シ。何カ故ニ誹二謗シテ仏性論ヲ一偽トナスヤ。

（『龍大論集』九九頁三一三―三二〇）

とあり、『宝性論』を一闡提成仏の教証として引用する中で『仏性論』の真偽問題が取り挙げられている。なお、当該箇所のすぐ後には、『仏性論』の一闡提の成仏を説く教えを了義とし、不成仏と説く教えを不了義とすると説く論文が引用されることから、(8)ここで問題とされているのは、『宝性論』巻三には『仏性論』と同じく一闡提の成仏が説かれることから、『仏性論』を偽とすることは出来ないとのことであろう。

このように、『究竟論』には真諦訳『仏性論』への疑義と、それに対する法宝の反駁が記されている。この『仏性論』への疑義を呈した人物を特定することは困難であるが、『究竟論』という著作の性質を考えると、三乗真実説を主張する玄奘門下の論師から呈された疑義であると考えられる。

また、『仏性論』の真偽をめぐる問題が三一権実論争の論争テーマの一つとなっていることは、三乗真実説を主張する側の論師が、一乗真実説を主張する側の論師の所論が真諦訳『仏性論』に依拠するものであると捉えていたことを示すものであろう。そこで次に、『究竟論』の一乗真実説の主張において、真諦訳『仏性論』が如何に関連しているのか検討を加え、唐初期の三一権実論争の一乗真実説を主張する側にとって、真諦訳『仏性論』がどのような論書であったのか明らかにしたい。

三　『究竟論』の真諦三蔵訳『仏性論』への依拠

『究竟論』の教学が真諦三蔵訳経論に依拠したものであることは従来より指摘されてきた所であるが、(9)ここでは、これまで注目されてこなかった法宝の五時教判と『仏性論』の関係について考察を進めていきたい。

法宝の教判論は、第一時教（小乗経、有教）、第二時教（般若経、空教）、第三時教（解深密経、中道・三乗教）、第四時教（法華経、一乗）、第五時教（涅槃経、仏性）よりなる五時教判であるが、その教時に五時を立てる論拠として『仏性論』が用いられているのである。

『究竟論』の中で教時を主題として論じた章は巻一の「教

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

時前後章第三」であるが、その中で教えに前後五時があるとする立場の論拠として『仏性論』が引用されている。

問フ。諸ノ経論ノ中、或ハ云ハク一音演説シテ随テ類ニ各解シ、一一ノ法会ニテ獲ルコト益ヲ不同ナリト。〈中略〉准スルニ此レ等ノ文ニ、即チ教ニ無シ前後。諸ノ経論ノ中、或ハ云ハク説法ノ前後不同ナリト。〈中略〉仏性論ニ云ハク「化身ノ説クコト法ヲ前後五時ナリト」、涅槃論ニ説ク「初ノ次第教トハ者、以テ生死ヲ度スカ衆生ヲ故ニ名テ為ス船ト。法花ハ以テ万行ヲ為シ船ト、今ノ涅槃経ハ以テ無キヲ生死ヲ為スト船ト」。故ニ知ヌ、法花涅槃ト与ハ前教ト別ナリト。准スルニ此レ等ノ文ニ、教ニ有リ前後。（『龍大論集』八四頁二九―三九）

五時教判は『究竟論』の主張の根幹を支えるものであることから、『究竟論』の教学は真諦訳『仏性論』に依拠したものであると言えよう。そしてこのことは、先に述べた、三乗真実・五性各別説を主張する論師が、一乗真実説を主張する論師の教学が真諦訳『仏性論』に依拠するものであると捉えていたとする推測を裏付けるものである。

また、法宝に限らず、一乗真実説を主張する論師にとって、『仏性論』等の真諦訳経論がその主張の論拠となっていたであろうことは、霊潤（五八〇―六六七年頃）[10]の『十四門義』に、

尋ヌルニ諸経ノ中ニ所ノ明ス義旨ヲ、生死涅槃ハ皆如来蔵ノ依持建立ナリ。広クハ如シ経ニ説クカ。是ノ故ニ、若シ執セハ定テ有リト一分ノ無仏性ノ衆生、与ニ華厳経、涅槃経、勝鬘経、楞伽経、無上依経、宝性論、仏性論、摂大乗論等ノ、甚深了義ノ理教ニ相違ス。不レ可カラ依信ス。

（『伝全』巻三・一六四頁）

とあり、『仏性論』等の真諦訳を「甚深了義の理教」と位置付けていることからも明らかである。

結語

以下に、これまでの検討結果について纏めておきたい。

『究竟論』巻一「略述綱要章第二」、巻二「列経通義章第五」には、三乗真実を主張する側からの真諦三蔵訳『仏性論』に対する疑義と、それに対する法宝の破斥が記されている。これは、一乗真実を主張する者の所論が真諦訳『仏性論』に依拠するものであると、三乗真実を主張する側が考えたためであり、『仏性論』の翻訳上の問題を突くことが、一乗真実説を主張する者への批判として有効なものであった為であろう。

このことは、『究竟論』の教時説が『仏性論』に依拠したものであることからも裏付けられるものであり、一乗真実を主張する論師の教学が真諦三蔵訳経論に依拠したものであることは、『究竟論』の教時説の論拠として『仏性論』が依用されることや、霊潤が真諦三蔵訳の『仏性論』等の教説を了義と捉えていたことからも明らかである。

以上のことを勘案すると、円測の『解深密経疏』巻四に当時の一乗真実・悉有仏性説を主張する論師を「真諦等一類の諸師」と呼称することを論拠として、『究竟論』を「真諦系一乗家の著作」と位置付けた根無一力氏の指摘は穏当な解釈

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

であると思われるのである。

なお、本稿では、『究竟論』が「真諦系一乗家の著作」であることと、法宝を涅槃論師とする布施浩岳氏の説との関係について検討することが出来なかった。この点については、『究竟論』と『涅槃経』の関係を検討する中で論じたい。

1 『究竟論』の引用は、淺田正博「石山寺所蔵『一乗仏性究竟論』巻第一・巻第二の検出について」（『龍谷大学論集』四二九号、一九八六年）、同「法宝撰『一乗仏性究竟論』巻第四・第五の両巻について」（『仏教文化研究所紀要』二五集、一九八六年）に翻刻されている資料を用いた。

2 『大正蔵』巻五十・七二七上中。

3 布施浩岳『涅槃宗の研究　後篇』（一九四二年、叢文閣）参照。

4 根無一力「一乗仏性究竟論の撰述と時代背景」（『叡山学院研究紀要』九号、一九八六年）参照。根無氏は円測の『解深密経疏』をも「真諦系一乗家の著作」とするが、橘川智昭「円測の真諦説批判」（『印度学仏教学研究』五十巻二号、二〇〇二年）等の研究成果によれば、円測はやはり三乗真実の立場に立つ論師であると思われる。

5 霊雋『対法論疏』の記述については、中村瑞隆『梵漢対照　究竟一乗宝性論研究』（一九六一年、山喜房佛書林）参照。

6 そもそも真諦訳『仏性論』には、文献学的に問題があることが指摘されているため、玄奘門下の『仏性論』への疑義が一乗真実説批判のために導き出されたものであるかは不明である。なお、最新の研究として、石井公成「真諦関與文献の用語と語法—NGSMによる比較分析—」（船山徹編『真諦三蔵研究論集』、二〇一二年、京都大学人文科学研究所）がある。

7 法宝『倶舎論疏』巻一には「後代ノ読ム瑜伽ヲ者ハ、以テ声聞地ニ破スヲ有性ヲ故ニ、涅槃経ニ説クハ一切衆生悉有仏性ト是レ不了義ナリトシ、仏性論ヲ偽トシ惑フコトヲ之ニ甚シキ也」（『大正蔵』巻四一・四五九中）とあり、「略述綱要章第二」と同様の記述が存在する。

8 『龍谷大学論集』九九頁三二一—三三一。

9 寺井良宣「法宝の「教時前後」説の個性的特質と問題点」（研究代表・淺田正博「一乗仏性究竟論における問題点とその検討（一）」、『仏教文化研究所紀要』三四集、一九九五年）参照。

10 霊潤の生没年については、池田将則「道基の生涯と著作」（船山徹編『真諦三蔵研究論集』、二〇一二年、京都大学人文科学研究所）参照。

〈キーワード〉三一権実論争、法宝、真諦三蔵、『一乗仏性究竟論』、『仏性論』

（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）

NII-Electronic Library Service